

東カリマンタン沿岸域村落における森林資源利用の変遷と
「ブギス人」による影響

**The “Bugis” and Their Influences on Changes in Forest Resource Use
in Coastal Villages in East Kalimantan**

市川 昌広*、アジス サラム、遅沢 克也**

Masahiro ICHIKAWA, Aziz SALAM, Katuya OSOZAWA

Abstract

The “Bugis” refers in this paper to the people living in East Kalimantan originated from South Sulawesi, such as those coming from the Bugis, Makassar, Mandar and Tana Toraja regions. In East Kalimantan, especially in villages in coastal lowlands, many Bugis live together with local people. This paper aims at studying the influences of the Bugis on the changes in forest resource use, which took place in the villages for the last four to five decades. Fieldworks, including interviews with villagers and observation of their forest resource use, were conducted in two villages in coastal lowlands and a village located in the middle reach of Mahakam River as a comparison. As a result of the fieldworks, recent forest resource use and its periodical changes in the past were revealed. The coastal lowland villages, in particular, saw the greater changes in forest resource use due to the expansion of the Bugis. The Bugis had engaged in trading of forest products, such as dammar, rattan and bird nest by the 1960s. However, since the Bugis directly came from Sulawesi and brought in chainsaws and water buffalos as tools for logging after 1960s, the Bugis has aggressively expanded their economic activities into logging and transportation of timbers.

I. はじめに

熱帯雨林の劣化・減少が問題とされている中、森林資源管理の重要性は高まってきている。その際、森やその近隣に住み、暮らしをたてるために森林資源を長い間利用してきた森に住む人々の森林利用や管理は、熱帯雨林気候下の森林保全のために重要な役割りを果たすと考えられる。ただし、彼らによる森林利用は、あらゆる地域で一様ではなく、地域性がみられるということを理解することが森林管理を検討するうえで大切である。東南アジア島嶼部では、熱帯雨林はボルネオ島を中心にして分布するが、同じボルネオ島内においても森にすむ

* 総合地球環境学研究所 ; Research Institute for Humanity and Nature

** 愛媛大学農学部 ; Faculty of Agriculture, Ehime University

人々の森林利用に地域性がみられるのではなかろうか。

本稿では、ボルネオ島の中のひとつの地域として、マカッサル海峡に面する東カリマンタンや南カリマンタンの沿岸域の森林資源利用の地域性を探ることを目的にしている。結論を先取れば、そこでの森林資源の利用は、ブギス人をはじめとするスラウェシ島から到来した人々の影響を大きく受けて展開してきたことが大きな特徴のひとつであることをフィールドワークの結果より述べている。

東・南カリマンタンでは、スラウェシ島出身者が多く住む。彼らは、ブギス人、マカッサル人、マンダール人、トラジャ人などである。カリマンタンに先住の人々は、彼らを総称して「ブギス人」と呼ぶ。また、カリマンタンでは、ブギス人でないスラウェシ島出身者も自らをブギス人と名乗ることがよくある。本論文でいうブギス人は、そうしたスラウェシ出身の複数のエスニックグループの総称である。

研究方法は、おもにフィールド調査により、今日の森林利用や過去におけるその状況について、観察や聞き取りをおこなった。聞き取り相手は、村長、慣習長を始め、村の現在および過去の状況について詳しく記憶している村びとたちである。過去の状況は、聞き取り相手の親世代のことまでで、おおむね 1900 年以降を対象としている。フィールド調査は、2005 年 1－2 月(マハカム川中流域)、および 2006 年 1 月(東・南カリマンタン沿岸域)、8 月－9 月(東カリマンタン沿岸域北部、マハカム川中流域)に実施した。

II. 調査地域の概要

マカッサル海峡に面する東・南カリマンタンのうち、今日あるいは近年まで比較的、森林資源利用が活発にみられてきた北部に位置するブンガロンとブンガダンという 2 つの村(図 1)でフィールド調査をおこなった。地元の人々によると、道路の開通がおそく、地理的に遠方であったことから、大規模な森林開発が近年になってようやく盛んになった地域である。また、フィールド調査では、沿岸地域との比較のために、マハカム川の中流域にある村ママハックタボおよびその周辺の村々(図 1)でも調査をおこなった。

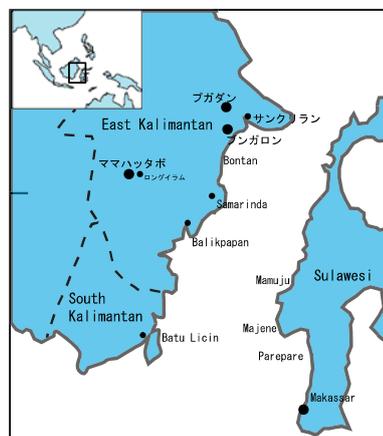


図 1 調査地域

III. 調査結果

調査をおこなった 3 つの村における、村の概要、森林利用の変遷、および現在の状況について以下に記述する。

1. ブンガロン

(1) 村の概要

ブンガロン岬からブンガロン川を直線距離にして約 20km さかのぼったところに位置する。ここより上流では川が浅くなり、木材を運ぶような大型の船は遡上できない。海岸沿いの低地から丘や山地へ移行する地帯である。

元来、クタイ人の集落であったが、近年、石炭採掘が開始され、木材伐採・製材の中心地となり急速に人口が増加している。石炭企業は2つあり、それぞれ 1999 年と 2003 年に開業した。1990 年代まではひとつの村 (desa) であったが、その後、2000 年に郡 (Kecamatan) になり、2004 年では人口約 8500 人の 11 村からなる。

(2) 森林利用の変遷とその背景

a. 1930 年ごろの状況

この村にクタイ人が入植したのは、1800 年代後半だと推定される。オランダ政府がツバメの巣を採集させるために、トゥンガロンのクタイ人を入植させたという。オランダ統治時代には、籐、ダマール、ハリネズミの胃石 (geliga landak)、サイの角、沈香などの林産物が交易された。サイの角については、3 人の年長の聞き取り相手 (1929 年生れ、1932 年生れ、1933 年生れ) 自身はみたことはないが、彼らの父がサイを狩った話を聞いたことがある。1900 年代初めごろの話だという。これらの林産物は、村を訪れたトゥンガロンのクタイ人と交易されたという。

1930 年代では、ボルネオ鉄木の屋根葺き材 (sirap、以下、鉄木瓦)、籐、ダマール、沈香などを村に船で来た華人に渡し、華人からはコーヒー、砂糖、米、タバコなどを得ていた。ツバメの巣は、ブンガロンの村びとも採集したが、採集場所 (洞窟) は上流にあり、おもに取っていたのは、ひとつ上流側のトゥピアンランサット村の人々だったという。

1930 年ごろは、ブンガロンは 150 家族ほどが住む村であった。すでにブギス人が 1、2 人、バンジャール人が 1、2 人、中国人が 1 人住みついており、彼らはクタイ人同様、林産物採集をしつつ、焼畑を作っていた。

b. 林産物を追う移動的な暮らし

村びとは、特定の場所にかたまって住んでいたのではなく、川沿いで籐などの林産物が多く取れる森の近くに焼畑を作り、小屋を建てて暮らしていた。ひとつの場所のまわりに林産物が少なくなると、新しい森に林産物を求めて場所を移すという移動的な暮らしをしていた。稲作は湿地ではおこなっておらず、すべて乾いた土地でおこなう焼畑であった。湿地稲作をおこなうようになったのは、第二次大戦後からであった。このように、村の中で分散して林産物の多いところを追うようにして住む生活は 1960 年代までみられた。

インドネシアの独立 (1947 年) 後は、ブンガロンから学校や保健所などの公共施設がなくなり、農業の不作などによる食料不足の年に、村を出てサマリンドアやボンタンなどへ移る人が増え、村の人口は減っていった。

1950 年代においても林産物は、サマリンドアから船で来る華人と物々交換されていた。1950

年ごろからブギス人が新たに來はじめ、およそ 20 家族が河口のムアラブンガロンに住みついていた。彼らは漁撈を営んでいた。彼らは、頼母子講などにより資金を得て、次第に林産物の交易を営むようになった。

1960 年ごろになると、今日の村がある場所に住む人の数が増えてくる。それ以前に村びとが比較的集住していた場所は、そこから 1 km ほど下流であったが、1958 年に病がはやり、1960 年ごろに集住地を移したのである。

林産物の動向は、ダマールは 1961 年まではさかんに交易されたが、それ以降、急に需要がなくなったため、採集されなくなった。籐、鉄木瓦は、1950 年代、1960 年代がもっともさかんに採集され、交易された。とくに籐はブンガロンの村びとにとって大切な交易の商品であった。村びとがはじめてサマリنداに帆船で出かけたのは 1962 年であった。それ以前は、すべてサマリنداから來る華人の交易者に林産物を出していた。1970 年代中ごろでは、風が悪いとサマリنداに行くのに 3 日ほどかかった。

c. バンジールカップ（川沿いの木材伐採）

1967 年から 1974 年には、バンジールカップがさかんにおこなわれた。村びとが川沿いの湿地林の木を斧で伐採し、のこぎりで 4m の長さに輪切りにする。その材を増水（バンジール）時に川の本流まで材を引き出し、そこで華人やブギスの商人に材を売る仕事である。とくにさかんであったのは、1968 年から 1969 年の間であった。

バンジールカップは 1970 年に衰退しだし、1974 年にはみられなくなった。政府が伐採に対する規制をはじめ、木材伐採は政府が企業にコンセッション（伐採権）を与えておこなう制度にしたためである。ブンガロン周辺にも 1970 年代初めに Hutrindo と Podrisa という 2 つの企業が入って、本格的に商業伐採が始まった。

バンジールカップのときに仕事を求めて、ブギス人、ジャワ人、バンジャール人などの多くの人々がブンガロンに到來した。彼らは、バンジールカップが終わると多くが村を離れたが、村に残る者、伐採企業で職を得て働く者もいた。1970 年ごろには、村びとはいくつかに分散して居住していたが、現在の村がある場所には 20 軒ほどあり、そのうち 5 軒がブギス人であった。彼らすべてのブギス人は、地元の人々から林産物を買取り、彼らに日用品などを売る商売に携わっていた。村にはモスク、小学校、森林局の出先事務所などの施設があった。その後、伐採企業に働く人が到來し、村の人口が増えていく。ブンガロン村でも、1970 年代から伐採が停止する 2001 年まで、半分以上の世帯が伐採企業の仕事に携わっていた。

d. 木材伐採のためのブギス人の到来

1980 年ごろスラウェシよりブギス人が村に來だし、森に入って木材伐採を始めた。伐採道路を使い、道路沿いの伐り残された木々を対象にした伐採をしたのである。鉄木やブンキライは伐採禁止木になっており企業は切り出せない。それらとともに、残された比較的太い白材（メランティ、カプール、バングリス、ジュルトンなど）を伐採し、ある程度、製材した後ボンタン（東カリマンタン）、スラウェシ、ジャワなどへ運んだ。当初は、伐採から製材、運搬まですべてがスラウェシから來たブギスによっておこなわれた。

1984年ごろには、ブギス人はスラウェシより、木材の引き出しのために水牛を運び込んだ。チェンソーもブギスによって持ち込まれ、1980年代中ごろにはブンガロンの村びとの間にも普及し始めている。1987年ごろには、以前より村に住んでいるブギス人も木材伐採に参入した。1990年ごろには、村に10人ほどの木材伐採、取引にかかわる元締めブギス人がいて、仕事を求めてスラウェシより到来したブギス人が90人ほど村に住んでいた。鉄木を主とする木材の生産量が最も高かったのは1991年から1995年であった。スラウェシからブギス人の船が数多く訪れるようになったのは、1990年代前半からである。それまではバトゥリチンに材を求めていた船がブンガロンに移ってきた。多いときには平均50 m³の材をつめる船が1か月に20隻訪れた。主に運搬した材は鉄木である。鉄木1本0.8 m³とすると、当時、1か月125本伐採されていたことになる。その後、2001年まではさかんにおこなわれた。鉄木は、とくにスラウェシからの需要増によるが、それは、スラウェシでは成功者のシンボルとして鉄木材による家を建てるのがブームになったためであるという。

e. 80年代以降、停滞する林産物採集

一方、籐の採集も1980年代後半まで続いていたが、値が落ちたことに加え、1982～83年の山火事で籐が少なくなったため、その採集は下火になった。ツバメの巣の採集も同じころ減っていった。また、鉄木瓦は、1980年代以降、トタンが普及してくると徐々に需要が落ちていった。沈香の採集は、ブンガロンでは長らくおこなわれておらず、村びとは探し方を知らない。1990年ごろからロンボック人が来て、それ以降は彼らが小規模に採集する程度である。

1992年には、サマリндаへの道が開通した。伐採道路を整備したもので、大雨時には不通となった。1990年代前半では、サマリнда行きの船が就航していた。船でサマリндаまでは12時間ほどかかった。

1996年の村の人口は2500人ほどであった。2000年には人口4700人で郡(Kecamatan)になった。2003年には人口8000人ほどになっており、2005年の調査時点でも増加傾向は続いている。上記のように、近年、道の開通、石炭企業の進出、活発に続く木材伐採・製材がみられ、他地域からの人の流入が続いている開拓前線的な場所である。

2. プガダン

(1) 村の概況

サンクリランより直線距離にして約40 km、スピードボート(時速約50 km)で約1時間さかのぼったところに位置する。ニッパ帯はすでに過ぎており、村の周囲には、高さ10 m程度の湿地林がみられ、ところどころで丘陵が川沿いにまで迫るようになり、石灰岩の山が多くみられる。元々はクタイ人の集落であったが、後に村外から到来した人々として、トラジャ人、ブギス人、バンジャール人などが混じっている。2005-2006年で、ひとつの村(des)からなっており、その規模は322家族、1820人である。

(2) 森林利用の変遷とその背景

第二次大戦中は、現在の場所より約 0.5 km 下流に住んでいた。50 世帯ほどですべてクタイ人であった。その後、他地域への転出が続き、1950 年代、60 年代の人口は減少したようである。

a. 1950 年代、60 年代にさかんな籐、ダマール採集

1950 年代から 60 年代にかけて、収入面からもっとも大切な林産物は籐、ついでダマールであった。籐とダマールをもっとも採集したのは 1960 年代であった。その後、ダマール採集は 1975 年ごろまで、籐の採集は 1982 年の山火事まで続いたが、以後、ほとんどおこなわれなくなった。ツバメの巣は、昔から採集しており、ここに来るクタイ人や華人に売っていたが、1950 年代以降、籐やダマールに比べれば林産物としての重要度は低かった。政府からの採集許可を取らねばならない面倒もあるし、1982 年の山火事により巣の数が減少してしまった。1950 年代以降には、鉄木を 12 cm×20 cm 角、長さ 2～1.25 m の規格で伐って、サンクリランの森林局から来る汽船に売った。当時は、すべての村びとが鉄木伐採に従事した。

b. バンジールカップと企業の伐採

1960 年代終盤から 1972 年ごろにかけてはバンジールカップがみられた。ブンガロンの場合と同様、川から近いところにある樹木を斧で切り倒し、のこぎりで長さ 4 m に切り、サンクリランから来る華人に丸太を売った。1969 年では、プガダンにはクタイ人のみ 10 軒ほどの集落であったが、村外から村に到来する人が増えだしたのはこのころからである。

1973 年より企業による木材伐採が始まる。1995 年までに 3 つの国際企業が入れ替わり入ってきた。1973 年以降、企業での仕事を求めてトラジャ人が到来した。以前、スラウェシで同じ伐採企業で働いていた人々が移ってきたのである。トラジャ人は、1974 年から 1990 年までは、およそ 125 世帯がおり、焼畑農業をしつつ、ほぼすべての世帯が伐採企業で働いていた。仕事を求めて、同時期にブギス人、ジャワ人も村に転入してくる。

現在、村のある場所は、伐採会社が森を開き、道をつけて企業に働く到来者のために土地を与えた場所である。その後、元々のクタイ人たちは、同場所に付け加えて、新たに整地してもらい、0.5 km ほど下流から移ってきた。

c. 小業者による木材伐採

1995 年に大きな伐採企業が撤退すると、小規模な企業が出入りして伐採が続けられた。近年、東・南カリマンタン沿岸における木材生産地の中心は、以前のバトゥリチンからブンガロンやプガダンに移りつつある。村に隣接した川沿いの元木材集積場に小規模な製材所が作られるようになった。2004 年では、製材所は 2 つのみであったが、2006 年の調査時点では 13 に増えていた。経営者はすべて村外から来た人々で、ブギス人 6、華人 3、バンジャール人 4 である。製材所に隣接して、材の引き出し、運搬をする村外からの到来者も住み着いている。運搬に携わるものは、バンジャール人が多い。彼らやバンジャール人の製材所経営者は、以前はバトゥリチンで働いていた。バトゥリチンは大きくなり、警察や森林局などの政府の役所が増え、違法性の高い伐採を行いにくなくなったため、プガダンへ越してきたという。

2003年ごろからオイルパームプランテーション開発の企業が参入してきた。後述のように、村びととともに開発許可を政府からとり、木材伐採あとの森を皆伐してプランテーション開発が進みつつある。

d. 調査時での木材伐採・製材の仕事

木材を伐採する場所は、大きく2つに分けられる。一つは、オイルパームプランテーションの開発予定地の森林である。そこから比較的大径の木を伐採し引き出す。オイルパーム企業には一切支払っていない。もうひとつは、かつての伐採企業が建設した伐採道路沿いに残る木を対象にした伐採である。調査時では、こちらが主におこなわれていた。鉄木やブンキライなど企業による伐採が禁止されている木や比較的太い白材を伐採している。伐採道路から幅200m程度以内にある木が対象になる。それより離れると運搬に労力と費用がかかりすぎるためである。森から伐採道路までの運搬には、水牛も使われるが、トラックを動力に使った新しい方法もみられる。伐採し、ある程度の大きさに切断した木材を鉄のワイヤーに結びつける。伐採道路に停めたトラックの後輪車軸で鉄ワイヤーを巻き取りつつ、材を森から引きずりだす。

私が現場でみた例では、村からトラックで約1時間(KM18地点あたり)において、ブンキライの搬出と運搬をおこなった。かなり以前に倒れた木のように、それをすでにチェンソーにより長さ4m、幅0.5m、厚さ0.3mずつぐらいに切断してあった。そこに、鉄ワイヤーの一端を結びつけ、もう一端をトラックの車軸によって巻き取って、道路まで引きずり上げる。道路までの距離は約40mだが、10度程度の登り斜面となっていた。朝、伐採道路が乾きだす9時ごろトラックは村から出発し、作業は10時ごろから夕方6時ごろまでおこなわれた。当日、持ち帰った材は4m³弱であった。材は製材所に売る。製材所のオーナーからの聞きとりによれば、製材所はトラックのオーナーに立方メートル当り9万ルピア(約13500円)払う。トラックのオーナーは、伐採し、切断するチェンソー操縦者に35万ルピア、水牛を使う場合は持ち主に10万ルピア、トラック運転手(燃料代を含め)25万ルピア、人夫4人分7万5千ルピアを支払うので、トラックオーナーの儲けは12万5千ルピアである。ちなみに、トラックのオーナーは、1995年から2003年はバトゥリチンで木材運搬に携わっており、2003年以降、プガダンに来て仕事を始めた。

現在は、伐採道路のKM60あたりが最前線となり伐採が進んでいる。儲けが出るのはKM100あたりまでで、あと2年程度で道路沿いの伐採は終了するという。その頃には、製材機の償還期限も終え、使えなくなっているのので、機材など含め施設はここに残し、また、別の場所を見つけ、製材所を開くという。

e. 伐採に伴う村への支払いと村びとの対応

製材所は、木材立米当り、村に2万ルピア、森の持ち主に5万ルピアを支払っている。村人たちは自分の森を明確にするために、村の中で農民グループ(Kelopmpok tani)をつくり、森の囲い込みをしている。跳ねわな(jipah、クタイ語)の設置も未利用林の個人的な利用権を明確にする方法である。以前よりおこなわれてきたシカ(payao)猟の方法のひとつで、

シカが通過するところにロープによるわなを仕掛ける。すでに焼畑に開かれた森や、果樹などが植えられた森の利用権は、森を開いたものや果樹を植えた者か、その子孫が持つことになる。しかし、未だ利用されることがない森では、わなを仕掛けたものがその森の利用権を持つことができる。伐採業者は、わながあるところでは、その持ち主に補償代として材立米当り 5 万ルピアを払わなくてはならない。現在では、伐採道路によりかつての未利用林にアクセスが容易になったため、およそ半数の世帯がわなを仕掛けているという。

オイルパーム企業の進出に伴い、村人はコペラシというグループを作っている。コペラシが企業と組み、知事に開発許可を申請するのである。現在、プガダンには 10 程度のコペラシが存在する。すでに開発許可を取ったのは 2 つである。ひとつは会員 30 人ほどで 4000 ha の開発エリアを持っている。もうひとつは会員 25 人で 5000 ha のエリアを持っている。後者は、2002 年に木材の伐採が終わった時点で企業がオイルパームを植えずに去ってしまった。プランテーション開発がおこなわれたうち 20 % の土地は村のもので、そこからの収益は村びとが得ることができる。

3. ママハッタボおよびその周辺

(1) 村の概要

ママハッタボは、東カリマンタンの西クタイ県にある村(*desa*)である。州都サマリダからは、直線距離にして西へ約 220 km 離れたマハカム川中流域に位置している。サマリダや西クタイ県の中心メラックからは、定期船が就航している。メラックからママハッタボへの途中に、ロングイラム(*Long Iram*)という大きな町がみられる。オランダ時代から政府の役所が置かれていたところで、商人や交易者が以前より多くみられた。

ママハッタボの人口のほとんどをバハウ人が占めるが、彼らは 2 つの異なる地域からの出身者である。もともと住んでいたバハウ人の村に、1963 年以降、上流のロングパハンガイ(*Long Pahangai*)から移住してきたバハウ人のグループが合流したのである。バハウ人以外では、ブギス人、バンジャール人が少数住み着いている。バハウ人の宗教はカトリックがほとんど占める。

ほとんどの世帯は焼畑農業に従事しており、村における生業の中心である。集落の隣りに伐採企業の集材所があり、伐採関連の仕事に携わっている村びとも多い。伐採企業は 1971 年に操業を開始し、調査時まで続いている。

(2) 森林利用の変遷

現在の村がある場所には少なくとも 100 年ほどは定着的に住み続けている。それ以前は、2 km ほど下流に村(ロングハウス)があった。現在の村でも、後述のように、1970 年代前半まではロングハウスがみられた。

a. 重要な林産物：ダマール、籐、丸太材

1940、50 年代に重要であった林産物は、ダマール、籐、丸太(白材)であった。丸太は、第二次大戦前はオランダ政府に、独立以降はサマリダの森林局に売られた。籐は、いかだ

にのせてロングイラムへ売りにいった。ジュルトン (ketipan、hangan と呼ばれていた) の採集は、第二次大戦前および大戦後にはまだみられた。ラテックスをシート状に固形化し、それをロールに巻いて、いかだによってサマリダへ運んだ。ツバメの巣は、村から相当上流にさかのぼった(今日のエンジン付ボートで 6 時間)あたりまで行ってとったことがあるという。イリペナツ (Tengkawan) は、第二次大戦前は成り年にはよく取られて、ロングイラムから来る華人に売られた。1960 年代中ごろまではその採集はおこなわれていたが、戦前ほど盛んに行われていたわけではない。1950 年代、および 1960 年代初めは、華人の商人・交易者が村に来たり、ロングイラムに多くみられたりしたが、1960 年以降ブギス人の交易者が多くなったという。

b. ロングイラムのムスリムと華人

ロングイラムでの聞き取りによれば、そこには 1930 年代にはすでに華人とブギス人ともに住んでいた。現在あるブギス集落 (Kampong Bugis) もすでにあつた。1950 年代で商売や交易には華人、ブギス人ともに携わっていたが、華人のほうが多かった。しかし、1959 年政府は華人に対してサマリダへ移住するように命じ、1960 年代初めに華人の数は急減した。その穴を埋めて、商売や交易に携わったのがブギス人のほか、ブクンパイ人、バンジャール人であった。

1900 年代初期にオランダ政府がこの地域に入ってきた。それ以前にすでに現在の中部カリマンタン、南カリマンタン、南スラウェシなどの地域の出身のムスリムが入り込んでいた。政府は、ダヤックとムスリムが結んで、反抗するのを恐れた。当時、船住みで移動性が高かったムスリムを統制するために彼らをロングイラムに定住させた。さらに、ダヤックとムスリムの関係を絶つために 1930 年代に華人を入植させた。

c. たびたびあつたバンジールカップ

すでに述べたとおり、この地域では、第二次大戦前から白材を切り出し売る仕事があつた。村びとはバンジールカップと呼んでいる。すなわち、その仕事は、川沿いの樹木を伐採し、4m の長さに切断した丸太を増水時に浮力を利用して川まで引き出し、そこで売る。1950 年代半ばに一時盛んになり、その後、ブンガロンやプガダン同様、1960 年代後半に盛んになった。ただし、ここでは、水に浮かない鉄木は、鉄木瓦を作るためには利用されたが、材を売るためには伐採されなかった。最近では、1997 年にバンジールカップが 1 年半ほどみられた。地方分権化の動きに伴い、村の土地での伐採の規制が解かれたと考え、村人が一時的にバンジールカップをおこなった。

d. 企業伐採の開始と人の集中

先述のように、上流のロングパハンガイからバハウ人が最初に到来し、住みついたのは 1968 年であった。その後、多くが流入してきた。移住の理由は、上流では学校や病院がなく、それらの施設が整ったロングイラムまでは、危険な急流を通過して 4 日間かかった。もっと便利な生活を求めて下流に下りてきたのである。1974 年ごろには、約 20 家族ほどが移住してきた。その当時、先住のバハウ人は 40~50 家族いた。

1971年に木材伐採企業が操業を始めると、ブギス人、バンジャール人、ジャワ人などが到来し、企業で働くようになる。その一部や彼らの家族が村に住みつくようになった。1980年代には、仕事を求めてさらに多くのブギス人がこの地域に入ってきた。

e. ブギス人主導の林産物収集

1970年代中ごろになると、村に住み着いたブギス人がロングイラムのブギス商人から資金を借り、村びとを組織して、籐やダマールを森へ取りに行かせるようになった。伐採道路によって、それらの林産物が豊富にある森にアクセスできるようになっていた。バハウ人の村びと20~30人のグループを伐採道路で1日かかる遠方の森まで運び、そこで半月から1か月間、林産物の採集をさせる。村の元締めブギス人は、籐やダマールが20~30トンたまるとロングイラムの商人に売った。バハウ人の村びとは、資金がないため、個人で採集に行くことはあったが、グループを組織して大規模な採集はしなかった。籐は、1982年に突然値が急落した。村のブギス人によれば、これは森林産物の原材料輸出禁止の政策のためであるという。

f. 植林の動き

2004年の調査時では、多くの村びとが政府の補助金（RHL: Rehabilitasi Hutan Lahan）を得て、樹木を村内に植えようとしていた。メランティ、カプール、鉄木、イリペナツツ、チークなどの木々である。村びとが農民グループを作り、植林計画書を森林局に提出する。それが認められれば補助金が交付される。村びとは、収穫までに数十年かかる樹木を植える理由として、村周辺には木材伐採や山火事により材が取れる樹木がなくなってしまったので、子供や孫のために植えるという。

IV. まとめ

本稿では、東カリマンタン北部の沿岸地域の2つのクタイ人の村とマハカム川中流域のダヤック(バハウ人)の村の森林利用の変化について述べてきた(図2)。

沿岸地域においては、戦前は籐、ダマール、ツバメの巣、胃石、サイの角など、さまざまな林産物が採集され、交易されていた。1950年代、60年代においても、村人が森の中を歩き、見つけ出してくる籐、ダマールなどの林産物が交易品として採集されていた。ブギス人は、沿岸域の村には戦前から少人数が定着的に住んでいた。彼らの暮らしのたて方は、原住民のクタイ人と同様の林産物採集と焼畑であった。

木材が本格的に資源化するのには、1960年代終盤からであった。当初は、村びとによって川沿いでの伐採(バンジールカップ)がおこなわれた。ブギス人が多く到来するようになったのもこの頃からであった。1970年代に入ると、政府は伐採権を企業に与え、大規模な商業伐採を始めた。広い範囲の木材資源が、国や企業のものとなった。村びとは正式には森へのアクセスが規制されてくる一方で、伐採道路が建設されることによって、それまでの川沿いだけでなく、道路沿いの樹木へも「違法」にアクセスできるようになった。

のとくに沿岸地域の森林利用の特徴であると考えられる。

2000年以降、地方分権化の進展で、村の森の利用について村人の決定権が強まってきた。上記のような特徴を持つ沿岸地域では、ブギス人をはじめ、華人、バンジャール人など資金を持つ村外の人々が村に入り込み、村びとを取り込みつつ森林を利用・開発する傾向が高まっていくと考えられる。